

悲劇的アイロニー

はじめに

まず、ソフォクレスの劇『イーディパス王』⁽¹⁾を考えることから始める。

イーディパスについての伝説は、ソフォクレスの当時のギリシアの民衆にとっては周知のものであったし、その物語は今日のわれわれにとっても決して縁遠いものではない。

しかし、ここで考察の対象としているのは、その伝説そのものではなく、その伝説に取材したソフォクレスの劇である。そしてこれを考察するのは、悲劇の一般的性格をさぐる一つの手がかりとしてである。

富原芳彰

イーディパスは、放浪の途中、スフィンクスの謎を解くことによってスフィンクスを消滅せしめ、スフィンクスの難からテーベを救い、その功によって、テーベの王に迎えられた。そして、いま彼はテーベの王である。ソフォクレスの劇は、テーベの市民たちが王宮の前に集まり、テーベにふたたび新たにふりかかっている大きな災禍からテーベを救ってくれることを、新王イーディパスに歎願するところから始まっている。

テーベの市民たちの願うところはまたイーディパスの欲するところでもある。彼はテーベの現在の災禍を救うために彼のなしうることは何であるかをアポロの神託によって知るべく、彼の妃ジョカスタの兄弟クレオンをすでにデルファイに遣わしてある。そのクレオンがいままさに戻って来た。

クレオンは、与えられたアポロの神託を「よき知らせ」であると言う。すなわち、それは「もしすべてのことがうまく行けば、苦難多き事の中からさえよきものが生れて来るかも知れないことを伝えている」ものであると言う。テーベの現在の災禍は、スフィンクスと同じく、これを消滅させる道が少なくとも一つはあるのである。それは何であるか。神の答えは暗示的にとどまる――「われらの土に生まれ、われらの土を穢している一つの不浄なものがある。それを追い出さねばならぬ、それを留めてわれらを壊滅せしめてはならぬ。」

一つの不浄なものとは何であるか。いかなる清めが求められているのか。

暗示的な神託を現実の事態に照らして、これに具体的な解釈を与え得る者は、「他国人」イーディバスではなく、テーベの人クレオンでなければならぬ。

イーディバスがテーベに来る前、テーベの前王レイアスは、国を出て巡礼の旅の途上にあった時、何者かに襲われて殺された。不浄なものとは、国王レイアスの血を流してこれを殺した犯人のことであり、清めとは、その未知の犯人にその大罪相当の罰が加えられることである

と、神託の意味はクレオンによってそのように解釈される。しかも、神託は、その犯人はこれを遠くに探し求める必要はなく、その者はテーベに生まれた者であり、いま現にこのテーベの町に在る者であることを明らかにしている。そして、求める犯人はこれを探せば見つかるものであることを告げている神託は、逆に、これを探さなければついに見つかることのないものであることをも告げているのである。イーディバスのなすべく、かつなしうることは明らかになった。それはレイアスを殺した犯人を探し出すことである。イーディバスは犯人検出の行動を開始することを決意する。その行動は、レイアスのためであり、テーベの町のためであると同時に、それは彼自身のためでもあるとイーディバスは考える。「レイアスを殺した者は、それが誰であるにせよ、彼の危害の手を私に対して向けようと思えるかも知れない」からである。

イーディバスは、レイアス殺害の犯人を探しはじめる。彼は王宮の前に集まったテーベの民衆に向かい、「この中に誰か犯人を知っている者があればその名を言え」と命ずる。民衆は黙っている。イーディバスはさら

につづけて、「誰かみずからの犯行を隠している者があれば自首せよ、自首すれば刑は減じられて追放にとどまるであろう」という。民衆の中からはやはり声がない。イーディバスはなおもつづけて、「もし他国の者が犯人であり、その犯人を知っている者がこの中にいるならば、その名を言え。言った者には褒美が与えられるであろう」と言う。民衆は依然として沈黙を守ったままである。民衆の中から何の応答も返って来ないことを見たイーディバスは、もし後日自己のまたは他人の罪を隠匿した者が発見された場合に、彼によってその者に加えられるべき恐ろしい罰と呪いとを民衆の前に宣言する。

かの神託を下したアポロは、犯人が誰であるかを知っているはずである。しかし、「神にその意に反して言を強制することは人力の及ばないことである。」そこで、アポロに次ぐものとして、盲目の予言者テレジアスが呼ばれて来る。イーディバスが、クレオンの進言によって、すでにここに召喚させていたものである。

テレジアスは、彼の知っていることを、はじめはなかなか言おうとしない。それはテレジアス自身が犯人だからであろうとイーディバスに疑われるに及んで、はじめ

て彼は彼の知っている恐ろしいことをイーディバスに告げる。「この国土を穢している呪われたる者はあなたである。あなたが探しているレイアス殺害の犯人はあなた自身である」と。そのみではない。「あなたはあなたの愛する人と罪の婚姻で結ばれている」と。

テレジアスの言は、イーディバスには悪意のある虚言としか思われない。それとも、あるいは、クレオンの計略ではないのか。このえせ予言者にあらぬことを言わせて自分を陥れ、彼みずからが王位につこうとするクレオンの奸計があるのではないのか。イーディバスには、スフィンクスの謎を、神託に頼らず、占術の類も用いず、彼ひとりの力で解き得たということから来る自信があった。テレジアスを人々の目に尊からしめる彼の占術は、スフィンクスの謎を解き得ず、スフィンクスに対して無力であつたではないか。テレジアスに聞くことを自分にすすめた者は他ならぬクレオンであつた。こう考えると、イーディバスには、テレジアスの言はますますクレオンと彼との陰謀に発する、奸悪な虚言としか思われない。しかし、イーディバスの怒りとさげすみにもひるまず、テレジアスの言葉はつづく。

あなたが追跡を命じた人、レイアスを殺した人——その人はここにいます。他国人とされ、われらの間に逗留する人とされているが、やがて、テーベに生まれた人であることがわかり禍に至る人。見える人として来り、盲人となって去る人。いまは富んでいるが、やがて乞食となる人。杖を手に、亡命の国へまさぐり行く人。やがて明らかになるごとく、彼がいつくしむ子供たちにとって、同時に兄であり父である人。彼を生んだ女に対して、息子であり夫である人。父を殺し、父に取って代わった人。

この予言を残してテレジアスは去る。つづいてクレオンが登場し、イーディパスが彼にかけた嫌疑がいかに根拠のないものであるかを、民衆とイーディパスとに弁明する。

イーディパスとクレオンとの言い争いを耳にして出て来た王妃ジョカスタは、イーディパスがテレジアスの言に心をわずらわす必要のないことを告げて彼を安心させようとする意図から、いまは彼女のみが知っている古い予言のことを彼に話す。それは、アポロからではなく、アポロの神官たちから（と彼女は言う）彼女の前夫レイア

スに与えられた予言で、その内容は、レイアスは彼の子供によって、彼とジョカスタとの間に生まれた子供によって、殺されるであろうというものであった。しかしその予言は結局どうなったか。レイアスは彼の子供によってではなく、外地で盗賊の群に遭い、その一人に殺されたことはすでに周知のことではないか。一方、子供の方は、生まれて三日にもならない時、両の足首をたがいにくくりつけられて、訪う人もない山中に捨てられたのである。これを見ても、予言者の言のときに意を用いる必要はない、とジョカスタは言うのである。だが、そう言うジョカスタの言葉の中に、一つだけ、イーディパスの気にかかるものがあった。レイアスは、道が三つに分かれているところで殺された、とジョカスタは言ったのである。「その三差路のある国の名は？」と問えば、フォシスだと言う。「旅に出た時のレイアスの年齢は？ 風貌は？ 殺された時の情況は？」と、イーディパスはたたみかけるように問うた。それに対するジョカスタの答えは、すべて彼の不安を募らせるものばかりであった。彼の不安を取り除こうとしたジョカスタの意図は、逆に、彼の不安を増大させる結果を生んだ。レイアスが

殺される現場を目撃して逃げ帰ったただ一人の男がおり、彼はいま田舎で牧人となっている。イーディパスはその男の証言を聞かなければならないと思う。しかし、その証言を聞く前に、彼は彼が知るところによる自分の身の上をジョカスタに物語る。

イーディパスの父はコリント王ポリバス、母はドーリア出身のメロビーである、と彼は言う。ところが、ある日、深く酒に酔った男が、イーディパスに、彼はポリバスの子ではないと口走ったことがある。イーディパスが両親にそのことをただと、両親はひどく怒って、これを否定した。しかし、イーディパスは偶然聞いた男の言葉が気にかかり、ひそかにデルファイに赴いたが、そのことについての神の返答は得られなかった。そのかわりに、そこで恐ろしい予言を聞いた。彼は父親を殺し、また母親と結婚して子供を生むであろうという予言であった。彼はこの恐ろしい予言から逃れるために、故国コリントを永遠に捨てる決意をして放浪の旅に出た。そして、その旅の途中、道が三方に分かれている場所に来た時、先触れの者に導かれる一台の馬車に出遭った。馬車には先程ジョカスタが行なったレイアスの記述に符合す

る人物が乗っていた。馬車の一行から道を譲れと横柄に命じられたことに憤慨したイーディパスは、かれらと戦い、まず馭者を殺し、馬を駆り立てる二又の突き棒をその馭者の手から奪い、それで馬車の主を殴り殺した。その他の者を含め、彼はその時の一行のことごとくをそこで殺した。その時殺した馬車の主が、もし、レイアスであったとすれば、テレジアスの言のとおり、自分こそレイアス殺害の犯人となる。しかも、彼はレイアスを殺したその手でレイアスの妻に触れていることになる。イーディパスは万一自分が犯しているかも知れない重大な罪の幻影におののいた。しかし、レイアスの死の事情の真相を知っているその場の目撃者のたしかな証言を聞くまでは、まだ一縷の望みが残っている。伝えによれば、レイアスは盗賊たちに襲われて殺されたと言うのではない。盗賊たちというのは、一人の孤独な旅人のことではあり得ない。ジョカスタも、ふたたび占いの類の信じ難いことを強調して、イーディパスの望みの糸を強める。レイアスはその子によって殺されるというのがアポロの託宣であった。しかるに、その子は、生まれてすぐ、山中に捨てられて、神託実現の可能性はかくして絶たれ

たのである。アポロの神託すら、実現不可能のことを予言したことになる以上、およそ占いか予言とかは意に介するに足りない、ジョカスタは言うのである。しかし、イーディバスを捉えた罪の幻影は彼を不安に陥れて放さない。

その時、思いがけず、イーディバスの許へコリントから使者が到着した。使者は、悲しくかつ喜ばしい知らせを持って来たと言う。コリント王ポリバスが死んだという知らせである。ポリバスは彼の家でおだやかに息を引取って死んだという。イーディバスをあれほど恐れさせ、そのために彼に故国まで捨てさせた予言は、見事にはずれたのである。彼は父親を殺すであろうという予言は明らかにはずれた。それは明らかにはずれたが、だが、もう一つの予言がある。彼は母親と結婚するであろうという予言である。その予言はまだ実現の可能性を残しており、恐れられなければならない。予言への不信を表明しつつ来て来たジョカスタはここでもまた言う。

恐れる？ 何を恐れる必要があるのでしょうか。偶然が私たちの生活を支配しており、未来のことは一切わかりません。毎日を、できるだけよく生きればよいので

す。母親と結婚するというにしても、とくにあなただけが恐慌を感じる必要はありません。同じようなことを夢見た男はたくさんいたのです。人生を生きて行くためには、そういうことは忘れなければいけません。

しかし、イーディバスの恐れを聞いて、そのいわれないことを、現実の事態にもとづいて指摘し、そのことによって、イーディバスを恐怖から救おうとするのは、コリントからの使者である。

コリントの使者は、イーディバスの心配を聞いて、彼がポリバスの実の子ではないことを明らかにするのである。彼がむかしシシロンで羊の番をしていた時、木立のかげの窪みで見つけた嬰兒が、イーディバスだったのである。足首をたがにくくりつけられて、足がはれていた。イーディバス(「はれた足」の意)の名はそのことからつけられたものである。そして、その嬰兒は、彼によって子供のない王ポリバスに与えられた。コリントの使者は、イーディバスをシシロンの山で見つけたと言ったが、もっと正確に言えば、彼はそこでもう一人の他国の羊飼いか赤子のイーディバスを渡されたのである

る。そのもう一人の羊飼いというのは、テーベの王レイアスに仕える者であるとかいう話であつたと思う、とコリントの使者は古い記憶をたぐるようにして言った。そして、イーディバスを彼にあづけたその羊飼いというのは、レイアス王殺害の現場を目撃している唯一の生存者としてその証言が求められて、いま呼び出しの使いが出されている男と同一の人物らしく思われる。果してそうか。これらのことについてもよく答えることができるのは、王妃ジョカスタでなければならぬ。果してそうかと、イーディバスが振返った時、ジョカスタはすでに顔面蒼白となっている。そして彼女は、顔面蒼白となりながら、イーディバスにこの探求を打ち切るようにと歎願する。イーディバスは彼の素性が卑しいと発見されることを彼女は恐れているのだと誤解する。そして彼は、「自分が誰であるかを知る」この探求を、謎の真底に達するまでつづける決意をさらに強く固める。しかし、ジョカスタにはすでに一切が判明していたのである。彼女は絶望の言葉を残して、イーディバスの前から、そしてわれわれの前から去って行く。

間もなく、最後の証人となるべき、テーベの牧人が、

初老の身を数人の兵に護られて、イーディバスの前に現われる。彼は、たしかに、かつてレイアスに仕えていた羊飼いであつた。イーディバスの質問と、コリントからの使者の暗示とによって、羊飼いの記憶は、次第にはつきりとよみがえって来る。彼はむかしたしかにシシローンでレイアスの羊の番をした。そして、ある時、そこで一緒になった他国の羊飼いに一人の男の嬰兒を渡したことがある。しかし、なぜそのようなことを聞くのかと、羊飼いはあやしんだ。ここにいるのがその時の赤ん坊だからだと、コリントの使者はイーディバスを指さして答えた。羊飼いは顔に恐怖の表情をあらわし、イーディバスの問いに答えることに躊躇を示しはじめた。答えは、羽交いじめにされた羊飼いの口から絞り取られるようにして出て来る。羊飼いがコリントの人に渡したのはレイアスの家に生まれた子供であつた。レイアスの子供であつた。その子供を彼に託した人は王妃ジョカスタであつた。それは、彼女が生んだ子であつた。目的はその子供を殺すこと。理由は、その子供は父を殺すという悪い予言があつたからである。しかし、羊飼いはそのいたいけな嬰兒を殺すに忍びず、他国へ連れ去ってくれることを

願ってコリントの羊飼いにその子を渡した。そのコリントの羊飼いが、いまポリバスの死を告げ知らせ、イーディバスを迎えに来たこの使者である。

もはやこれ以上の言葉は不要である。事実の環は完成し、一切は明らかになった。アポロの神託は正確に実現していたのだ。父を殺し、母と結婚した男としてのイーディバスの正体は、白日のもとにさらし出されたのである。

イーディバスよりも早く恐ろしい事実をさとしたジョカスタは、苦悩のあまり彼女の寝室で首を吊って死んだ。イーディバスは半狂乱の態で彼女の寝室に突進し、母であり妻であったその女の衣服から金のブローチを抜き取り、その針で突き刺して自分の両眼をつぶした。彼は自分の罪と穢れを正視するに耐えない。単純な死によって自分の罪と穢れが減び償われるとは思わない。この世においても、あの世においても、彼は永遠に自分の目がつぶれていることを願うのである。

二

犯人はイーディバス自身であるというテレジアスの予

言に惑うイーディバスを慰めようとしてジョカスタが言った言葉に、「偶然が私たちの生活を支配しており、未来のことは一切わかりません」(Chance rules our lives, and the future is all unknown.)というのがあった。しかし、この言葉はまちがっている。究極的に言えば彼女たちの生活を支配していたのはアポロの神託であり、そのことが彼女たちにはあらかじめ見えていないという意味で彼女たちには「未来のことは一切わからない」のになければならない。すなわち、ジョカスタは、彼女の言葉の前半において誤っており、後半において正しい。そして、彼女の言葉の前半は、その後半に対する理由づけであるから、結局、彼女は誤まった根拠に立って正しい結論を得ていることになり、そこに大きなアイロニーがある。

犯人はイーディバス自身であることを指摘したテレジアスの言葉に惑うイーディバスの心を安めようとする意図から、ジョカスタは、予言がいかに信ずるに足りないものであるかを例証しようとした。レイアスはその子によって殺されるという予言があった。その子は生まれるとすぐ人里離れた山中に捨てられ、その予言が実現する

可能性はかくしてつとに消滅させられ、現に、レイアスは予言とはまったくちがった死に方をしたではないか、というのが彼女の論証である。イーディバスに無罪の確信を与えようと意図された彼女のこの論証の行為は、その意図とはまったく逆に、自己の有罪への疑念にイーディバスを引き入れるものとなった。

これと同種の、しかし、これ以上にさえ強烈なアイロニーは、コリントからの使者の意図と彼がその意図から生み出した結果との間に見られる。コリント王ポリバスの死は、イーディバス自身が言っているように、彼の不在がポリバスに与えた心労をその原因と見ないかぎり、イーディバスによってもたらされたものではない。イーディバスは父を殺すという、彼に与えられた神の予言は、あきらかに、父に対する彼のもっと直接的な殺害行為を意味している。イーディバスは、彼が父を殺すであろうという予言はこれを見事に回避することに成功した。しかし、彼には、もう一つの同様に恐ろしい予言が与えられていた。それは彼が自分の母と結婚するであろうという予言であった。コリントからの使者は、この予言が実現される可能性のないことを示してイーディバス

を安心させ、喜ばせようとする意図から、その意図とはまったく逆の結果を生み出している。イーディバスがポリバスとその妻との間に生まれた子でないことを明らかにすることは、イーディバスがレイアスの子であり、ジョカスタが彼の母親であることの可能性を、すでにかなり濃厚になっているその可能性を、一段と強めることではない。コリントの使者は、イーディバスを予言の穴から救い出そうとして、かえって彼を予言の穴に突き落している。

『イーディバス王』におけるこのコリントからの使者の場合に見る、意図とその意図が生み出した結果との逆関係は、アリストテレスが彼の『詩学』において、悲劇のプロットについて論じ、「ペリペティア」(περίπεται, *peripeteia*)⁽²⁾というものを説明した時に例証として挙げている有名な例である。ペリペティア⁽²⁾というのは、「意図の逆転した実現」(reversal of intention)⁽²⁾である。F・L・ルーカスがアリストテレスの原文を言い変えた言い方を借りれば、「ペリペティアは、 x という結果を生み出すように意図された行動が x の逆のものを生み出す時に起こる」⁽³⁾。」

ソフォクレスのこの劇における最大のペリペテイアは、しかし、イーディバスその人において起こる。彼はテーベを災禍から救うために、その災禍の根源である不浄のものを発見し、それを取り除こうと意図した。彼はレイアスを殺した犯人の追求をはじめた。追求が進むうちに、彼が追い求めている犯人は彼自身であることが次第に明らかとなり、ついにそのことが確定する。追っていたと思っていた彼は、実は追われていたのであり、追う人はすなわち追われる人であった。『イーディバス王』という劇は、全体がこのアイロニーの上に成り立っていると言ってよい。コリントを去ることによって神の予言から逃れようとして、かえって神の予言の中へみずから飛び込ませることになったイーディバスの行動のアイロニーは、この全体的アイロニーに従属する部分的アイロニーである。彼は、父を殺し、母と結婚するという予言から逃れようとしてコリントを去ることによって、かえってこの予言の実現を彼の上に引き寄せた。

このように、ある意図が意図されたものとは逆の結果を生むという、意図とその結果との逆関係、言いかえれば、人間の行動のアイロニーは、悲劇の基本的性格をな

すものである。アリストテレスは、悲劇のプロットを二種に分類し、主人公の運命の変化がペリペテイアなしで起るものと、それがあって起るものとに分け、悲劇のプロットとしてはペリペテイアを含む後者の方がすぐれているとした。運命の輪の回転という形でとらえられた人間の世界にみる栄枯盛衰の姿、そのとくに顕著な場合としての王侯英雄の没落といった現象は、やがて明らかにする理由によって、これも悲劇と呼び得る。しかし、ある人間の不幸や災厄が、その人間自身の意図の逆結果として生じたものとして、あるいは、彼の行動の彼が前もって知らなかった必然的結果として、認識された時、そこにわれわれはいっそう強い、すぐれた悲劇性を感じると言ってまちがいはあるまい。

私はいま、ある人間の行動の彼が前もって知らなかった必然的結果、ということと言った。ある意図が意図されたものの逆を生み出す場合にも、その逆の結果は、実はその意図の必然的結果でなければならぬ。すぐれた悲劇性はその時に生ずる。ということは、ある人の意図なり行動なりは、それが悲劇を構成するためには、ある無知に発しなければならぬということである。ある意

図が意図されたものの逆を生み出すということは、その意図が必然的に生み出すべき結果が正しく予知されていなかったということに他ならない。行動は意図の実施であるから（意図のない行動はそのことによって悲劇を構成する力が弱いと判断されるから、ここでは一応除外しておく）、意図について述べれば、行動について改めて述べる必要はない。意図の逆転した実現、すなわちペリペティアということは、したがって、劇中のすべての人に起る必要はない。『イーディパス王』においては、予言者テレジアスには、イーディパスの意図が生み出すべき必然的結果は終始見えていた。彼にはペリペティアは起らない。彼はイーディパスの意図が生み出すべき必然的結果を知っていたからである。

すぐれた悲劇の基本的性格であるペリペティアは、意図の生み出す結果についての無知（あらゆる誤解を含む）に原因がある。その原因をアリストテレスは「ハマルティア」(hamartia)と、この言葉の中に含めた。この言葉は、英語では「tragic flaw」などと訳されたことがあって、不当に道徳的意味を付与されたことがある。道徳的な意味である性格の欠点あるいは罪性（たとえば、傲慢であ

るとか、嫉妬深いとか、野心家であるとかいう性質）をこの言葉は意味するものと誤解され、そういうものを悲劇の原因と考える考え方がかなり広く行なわれた。たとえば、ハムレットの行動性不足、マクベスの野心、オセローの嫉妬、リアの傲慢というようなことを考えて、そういうものがそれぞれの悲劇の原因であると考える考え方である。こういう考え方の根底には、いわゆる「詩的正義」(poetic justice 勸善懲惡)を求める人情的なものがひそんでいる。悲劇の主人公が受ける苦悩と禍いがまったく無罪の彼あるいは彼女に加えられると考えることに耐えられず、むしろ、かれらの受けた苦悩と禍いとを自業自得であると考えることによって、この世を道徳的に無法ではないと見ようとする願望がそこにひそんでいる。ハムレット、マクベス、オセロー、リアなどに、それぞれ、前に記したような、道徳的な意味を持つ性格上の欠点があるいは、あるとも見られるかも知れない。またそういう欠点がかれらの性格にあるということが重要なことかも知れない。だがしかし、アリストテレスが「ハマルティア」という言葉を用いた時、それによって彼がそういう道徳的な意味での性格上の欠点などというもの

を意味していなかったことは、今日では十分に明らかにされていることである。アリストテレスが「ハマルティア」という言葉で意味したものは、今日諸学者が明らかにしているところによれば、ある重要な事実または事情に対する無知から派生した行動上の誤りである。イーデイバスのハマルティアは、彼がレイアスを殺した犯人を探すという行動を取ったことである。同じ類推を用いれば、ハムレットのそれは彼が幽霊の言葉を受けて父の復讐を企てたことであり、マクベスのそれは彼が魔女の言葉を聞いて王位の横奪を企てたことであり、オセローのそれはイヤーゴの言葉を信用したことであり、リア王のそれは彼が国王の務めを去ろうとしたことであると言うことができる。

たとえば、ハムレットが父の復讐を企てたことが彼のハマルティアであると言った場合に、その命題の中に含まれる、ハムレットが父の復讐を企てたことが彼の行動上の誤りであるということについては説明を要すると思われるが、その説明は少し後にまわして、その前に、アリストテレスが悲劇のプロットの重要な要素として挙げているもう一つのことについて述べておく方がよい。そ

れは「アナグノリシス」(anagnorisis, discovery)ということである。この言葉の意味は、アリストテレスの与えている定義によってまさに明らかであり、「無知から知への変化」(『詩学』XX)を意味する。それは、ある人間が誰であるか、ある物が何であるかがはじめてわかるという単純なことから、ある人が何かをした、あるいはしなかったということの正しい認識、さらには、そういうことを通じての愛から憎しみへ、憎しみから愛へという変化をも包含する。要するに、ハマルティア、アナグノリシス、ペリベティアの三つの要素は、たがいに密接に関連しているものであり、たがいに密接に関連した悲劇の基本的性格を形成しているのである。ハマルティアの核心は無知であり、その無知が知に変化することがアナグノリシスである。そして、アナグノリシスはペリベティアを伴う時、悲劇のプロットの要素としてもっともすぐれたものになる。アリストテレスは『イーデイバス王』におけるアナグノリシスをそのようなすぐれたものとしている。イーデイバスは自分の正体が明らかになると同時に、彼自身が彼の追い求めていた犯人であることを知った。

さきほど私は、たとえばハムレットが父の復讐を企てたことが彼の行動の誤りであると言うことには説明を要するであろうと言った。ハムレットが父の復讐を企てたことが彼の行動の誤りであると言うことの意味は、彼がそれを企てなかった方がよかったとか、それを企てたことに道徳上の疑念があるとか、その他、いわゆる道徳的な判断とは無関係のことである。言わんとするところは、ハムレットがあのような運命の経路をたどることになった、すなわち、彼が彼の意図しなかったさまざまな結果を生んだその原因は彼が父の復讐を企てたことにあるということだけであって、問題は、ある情況下で取られたある行動とその必然的結果との、いわば論理的関係であって、その道徳的意味づけではない。ある行動の道徳的意味づけや評価ということは、むしろ、行なうことができるし行なわれてよいことであるが、悲劇のプロットの問題として、ある人物が行動上の誤りを犯すと言った場合の行動上の誤りとは、ある行動が取られた時その発動の源に無知があったことを言っているのである。もっと詳しく言えば、ある意図が無知から発し、その結果の予測を誤まっているということである。

意図（行動）が発動した源にあった無知が何かを媒介として知に転じた時、その意図（行動）が意図とは逆の結果を生み出すといった型タイプがすぐれた悲劇のプロットには共通に見られるものである。また逆に、ある意図にもとづく行動の経路の中にそのような型を見る時われわれはそこにすぐれた悲劇性を感じる。シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』のブルータスの行動の経路にその型を見るがゆえにわれわれは彼をすぐれて悲劇的な人物と感ずるし、シャイロックも、彼について見るかぎりには、同様である。マクベスが王位を奪うことに成功した後には言う、「こうであること（王位にあること）は何の価値もない、安らかにこうであるのでなければ」という言葉は、彼の悲劇の核心に触れている言葉である。

無知を知に転ずる媒介となるものは何でもよいが、悲劇においては、通常は些細な意味しか持たないものがそれである方が劇的効果が大きく、好ましいと思われる。イーディバスの無知を知に転じさせるきっかけが、ジョカスタが何気なく洩らした、レイアスが殺された場所が三差路であったという通常は些細とされることにあることは、その意味で劇的効果が大きく、この劇をすぐれた

ものにするのに大きな貢献をしている。「劇的」という言葉は、さまざまな意味を含めて用いられるが、その意味の一つは、あるものの意味が突然大きく変化することである。あるいは、あるものが突然大きな意味を持つことである。ボタンを押すことがトンネルの開通を意味する時、ボタンを押すという行動はその時「劇的」になる。「劇的」であることは、もちろん、「悲劇的」であることと同じではない。「劇的」なものが必然的に不幸や禍いを発生させる時にかぎってそれは「悲劇的」になる。ここでもっと一般的なことを言えば、ある行動が悲劇的になるためには、その行動がその行動をした人の上に不幸や禍いをもたらすものでなければならぬ。

以上に考察をつづけて来たことを、ここで一応取りまとめると、こういうことになる。すぐれた悲劇には、そのプロットに、ある基本的な共通の性格が認められる。それは意図とその結果との間に見られる一定の関係である。ある情況下で持たれたある意図あるいはそれにもとづく行動が意図されたものとは逆の結果を生むが（ベリベティア）、この意図の逆実現ということは、実はその情況下でその意図が生み出すべき必然的結果に他ならず、

意図の逆実現ということはその意図を持った人においてのみ起こり、その原因は、ある情況下における意図とそれが生み出すべき結果との必然的關係に対するその人のあらゆる誤解を含む無知である。この無知がある意図または行動という形で積極的な形を取る時、それは誤まった意図または行動となる（ハマルティア）。誤まった意図または行動の原因である無知が、何かの媒介で、知に転ずる時（アナグノリシス）、意図の逆実現ということが起こり、その意図を持った人の上に不幸や禍いをもたらされる。（その不幸や禍いは、愛する人の上にそれをもたらすといういわば間接的なそれを含む。）すぐれた悲劇はそのプロットの中心に右のような一定の型を持っている。悲劇のプロットの中心に見るこの一定の型を、私は以下においては「悲劇的アイロニー」という言葉で呼ぶことにする。

すぐれた悲劇には、かならず、悲劇的アイロニーが含まれている。含まれているというよりは、それがその骨格をなしている。悲劇は（悲劇にかぎらず、広く演劇は、と言ってよいが）、アリストテレスが言っているように、その本質はアクションの模倣である。したがって、悲劇

のいわば精髓はプロットにある。一般に、芸術は雑然たる現実に秩序あるいは型^{パター}を与え、そのことによって現実に意味を付与するものであると考えられる。悲劇が人間の行動(human action)の模倣であり、すぐれた悲劇は悲劇的アイロニーをそのプロットを中心に持ち、これを骨格として成立しているとすれば、すぐれた悲劇は人生の秩序あるいは型を悲劇的アイロニーであると見る人生観につながっていることになる。悲劇は、人生は基本的に悲劇であるという人生観を表現している。

悲劇はわれわれの無知から生ずる。この世においてわれわれの取る行動(その前に意図がある)が必然的に生むべき結果についてわれわれがあらかじめ正しく知り得ないことに悲劇の原因がある。もしかりに、すべての行動とその結果との関係が計算されつくした世界があるとすれば、そこでは、不幸や禍いに導く行動はあり得ても、もはや悲劇は存在しない。われわれは原因と結果の関係が明らかでない世界の中に投げ出されており、そういう不確かな、不安な世界の中で、たえず何らかの行動を取ることを余儀なくされている。われわれの行動は、究極的には、すべて冒険であり、われわれは一瞬ごとに危機

に臨んでいる。要するにわれわれは盲目である。すぐれた悲劇はそこにその発生の基盤を持つ。イーディパスが最後に自分の真の姿を知った時、彼が盲人の姿でわれわれの前にあらわれるのは、その意味で象徴的である。

ペリペティア、すなわち意図の逆実現ということも、人間が盲目であることの一つの証左にすぎない。意図の逆実現ということは、盲目の人間にのみ起こり得ることであって、彼に意図の逆の結果と見えるものこそ、実はその意図が必然的に生むべき結果に他ならなかったのである。すぐれた悲劇においては、ある情況下における原因と結果との狂いなき関係が示される。そこでは、ある人間のある行動は、正確にその結果であるものを生み出す。その結果が意図の逆実現と見えるのは、そう見える方の錯覚である。意図の逆が出て来たのではなく、実際は、そういう結果を生ぜしめることが意図されたのである。ある行動が意図の逆を生んだとすれば、まちがっているのはその行動であって、結果ではない。すぐれた悲劇では、ある情況下での、行動と結果との必然的、論理的因果関係が描かれるのであって、「詩的正義」その他の道德的意味づけは、原理的には、悲劇と本質的な関係

はない。イーディバスがレイアス殺害の犯人を見つけ出そうとしたことが、自分自身をその犯人として突き出す結果となり、イーディバスの意図とそれが生み出した結果とが、イーディバスにとって逆であったとすれば、イーディバスは因果関係をとりちがえた行動を取ったことになり、イーディバスの行動は誤り、まさに *mistake* であった。くり返して言うが、この場合行動の誤りということは、イーディバスはレイアス殺害の犯人を見つけ出そうとしない方がよかった、というような意味を毛頭含んでいないものではない。マクベスが王位横奪のためにダンカン王の殺害を企てた場合のように、因果関係の認識を誤った悲劇的行動が、同時に道徳的にも誤った行動とされうる場合もあるが、その行動が道徳的に誤まっているかいないかは、悲劇の成立には本質的関係を有する事柄ではない。すぐれた悲劇が成立するために本質的に重要なことは、悲劇的アイロニーが存在するか否かである。

『リア王』の中に、「はえといたずら小僧との関係、それがわれわれと神々との関係だ。神々はなぐさみにわれわれを殺す⁽⁴⁾」という言葉がある。運命の輪の回転によ

って、諸行無常によって、あるいは運命や偶然の打撃によって、人が不幸や禍いに陥ることは、これも悲劇である。アリストテレスの言う、ペリペテアを含まない悲劇である。この悲劇感⁽⁵⁾は、人間の力の及ばない、ある超越的な、圧倒的な力の前に敗北する、いや必然的に敗北せざるを得ない人間の無力感や絶望と関係がある。人間が置かれている世界の透視できない謎と、その暗黒の謎の彼方からあらわれ出て人間を圧し潰す正体不明の巨大な力とは、人間を狼狽させ、恐怖させる。そこでのわれわれの存在の根本的不安は、十分に悲劇的である。

われわれの存在の根本的不安がわれわれに恐怖を与えることは同じであるが、その不安を右とはちがった形で提示する悲劇がある。それが悲劇的アイロニーを含む悲劇であり、アリストテレスの言う「複雑な」プロットを持つ悲劇である。『リア王』の中の「神々は正しく、われわれのたのしい悪徳からわれわれを苦しめる道具をお作りになる⁽⁶⁾」というもう一つの言葉が、そこから道徳的意味を除去すれば、この種の悲劇の中核の型を示している。

イーディバスは、神託も占術も用いずに、まったく彼

ひとりの知力でスフィンクスの謎を解いた。そして彼は、世襲の制によってではなく、彼自身の力で王となった人、言葉の原義におけるタイラント (*tyrannos, tyrant*) であり、「神々と同等ではないが、人間の範たるべき人 (*paradeigma, paradigm*)」である。その彼にして、行動に誤算を生ずるのである。彼さえこの世にあっては盲目の存在であり、神々の道は彼の目にさえ隠されているのである。そして、神々の道は、彼の目からさえ隠されたところで、正確に、人間に対しては非情に、実現されているのである。人間は彼を超越した、ある巨大な力の働らいている世界の中にいて、その巨大な力の働らき方についてはまったく知らされていない。したがって、彼は行動の結果を正しく予測できない不確実な世界の中にいて、しかもたえずそこで行動することを強いられている。彼の行動は、ある巨大な力の彼の知らない働らき方によってその正確な結果が出される。彼の行動の生み出す結果は、その巨大な力の支配する世界では必然的であり、その結果は彼の行動の中に内在しているのである。しかし、そのことは人間には結果があらわれた後になつてわかることで、それ以前にはわからない。すなわち、

人間の一切の行動は盲目的行動たらざるを得ない。われわれは行動の結果の不確かな世界で生活することを強いられている。しかも、われわれはわれわれの行動の、われわれにははじめから予測を許されない結果によって、しばしば苦しまされ、不幸に遭い、災厄に悩まされるのである。悲劇的アイロニーは、この世におけるわれわれの行動の不安、したがって存在の不安の実相をあらわす定式であると言うことができる。

結果を予測できない行動の結果に悩まされるということは、人間から見れば、彼に加えられた不当の罰である。しかし罰は実際に不当に彼に加えられるのである。その不当な罰を人間に加える者（それを運命と呼ぼうと神と呼ぼうと勝手である）に対して人間は抗議することはできない。多くの悲劇の主人公がそれをした。しかし、これに勝つことはできない。そこに人間の永遠の悲慘がある。この不当な罰に苦しめられる人間を見て、われわれが外から同情を寄せる時憐憫 (*pity*) が生じ、それを人間一般の、したがってわが身のことと感ずる時恐怖 (*fear*) が生ずる。ここから、アリストテレスが「カタルシス」 (*catharsis*) という言葉で呼んだ悲劇の効果に関する問題

が出て来るが、この問題については別稿で論ずることにする。

(1) 上記の英訳テキストによる。

Sophocles: *The Theban Plays (King Oedipus, Oedipus at Colonus, Antigone)*. Translated by E. V. Rieu.
Penguin Books, 1947.

(2) Humphry House: *Aristotle's Poetics*, p. 96.

(3) F. L. Lucas: *Tragedy: Serious Drama in Relation to Aristotle's Poetics*, p. 111.

(4) V. i. 38-39.

(5) V. iii. 170-71.

(一橋大学助教授)